

平成 29 年度第 18 回講演会 記録

日 時	平成 30 年 1 月 27 日 (土) 13:00~16:00
会 場	此花会館 梅香殿
講 師	前滋賀県知事、前びわこ成蹊スポーツ大学 学長、元環境社会学会 会長 嘉田由起子 先生
演 題	「森・里・湖のつながりを再生する環境自治と琵琶湖の未来」
備 考	参加者 会員 135 名、一般 21 名、聴講 1 名 計 157 名 記録 山野 渉

はじめに

嘉田先生は京都大学卒業後環境社会学者として、自然と文化の両面で多様な価値を持つ琵琶湖の人と水のかかわりについて、30 年以上にわたり研究を続けられています。また滋賀県知事として 2 期 8 年にわたり「命と子育て、環境にこだわり、住み心地日本一の滋賀」を目指し大きな功績を残されました。この度、琵琶湖の現状と再生への道、琵琶湖の未来について、研究者と政治家の立場からお話いただきました。講演は非常に分かりやすくかつ迫力があり、最後に全員で「琵琶湖周航の歌」を合唱、大いに盛り上がった講演会でした。以下講演要旨。



1. 個人的背景と研究姿勢の起源

栃木県の生家の環境、高校・大学時代の体験などから環境共生社会へ関心を持つに至った経緯を紹介された。なかでも、農家に嫁いだ母の苦勞をみてきたこと。また母からの三つの教え（①自然の不思議 ②弱者への共感 ③食い扶持は自分で）から女にも学問が必要と自覚し、環境社会学者を志すことにしたくは胸に熱いものを感じた。

2. 文理連携（生活知と科学知の連携を目指した琵琶湖研究所での生活環境主義的研究）

1970 年代の武村知事時代に琵琶湖に赤潮が発生。石鹼運動がおこり、琵琶湖への関心が高まる。富栄養化防止条例が制定され、琵琶湖研究所が発足した。しかし行政と研究者の間で問題意識のズレがあり成果が出にくかった。この反省から生活者目線で地域住民への聞き取り調査を徹底して実施した。この調査から望ましい環境像とは ①多種多様な生き物 ②生活の中で生きていた湖と川（昔はこの水を飲んでいった） ③子供たちの遊び場としての水辺 ④自主的な水害対策と川への愛着。

自然を取り戻すには価値観の転換が必要であり、見落とされてきた価値も重視し、地域に応じた「生活環境主義」が必要と確信するに至った経緯が紹介された。

3. 琵琶湖博物館の建設

琵琶湖研究所のフィールドワークで、ミクロの“虫の目”での地域の現場を個別にしっかりと見て、マクロの“鳥の目”で滋賀県全体をとらえることを合わせて実施。得た情報を共有する場、まとめる場として 1985 年に琵琶湖博物館構想を提出、11 年後の 1996 年に開館した。この博物館は入館者の案内を文字ではなく、そこにいるだけで知りたいことが分かる仕掛けを作り、これを嘉田先生は「自分化」という。この博物館を出発点にして、人と琵琶湖のかかわりを現地で実際にみて欲しいと願っているとのこと。

4. もったいない（滋賀県知事としての2期8年間）

2006年の滋賀県知事選に出馬、「泡沫候補」とか、「軍艦と手漕ぎ舟」とか「よそ者、女、学者に知事がつとまるか」などいわれた選挙戦で、「もったいない」をキャッチフレーズに見事当選。琵琶湖に恋した知事として環境政策にも大きな足跡を残された。

5. 琵琶湖の未来

関西全域の皆さんに訴えたい、上下流連携の中での琵琶湖は近畿1450万人の命の水源地であり、歴史遺産と文化資産が多くある。日本遺産に指定された琵琶湖の水と祈り、暮らし、食の文化は次世代に引き継ぐべき大切な文化である。このような琵琶湖の多面的価値を知り、琵琶湖を大切に守っていくことを。



最後に、全員で「琵琶湖周航の歌」を合唱

【記録者所感】

ほんの数十年前まで、びわ湖周辺の住民は、湖に注ぐ川やびわ湖の水を生活用水に使用していた。また、湖に注ぐ川や堤防の管理を自ら行い防災にも備えてきた。びわ湖とともに生きる人々の経験と知恵が存分に生かされ、当然ながら漁労で生活が充分成り立つ豊かな湖であり、同時にびわ湖固有の歴史が生まれ、文化が醸成されてきた。

この関係が一変したのは、第二次大戦後に河川管理や湖の管理を地域から取り上げ、国、県、市など、行政が行うようにしたことが大きな契機となり、さらに高度成長経済や衛生指導などが重なり、びわ湖や河川管理に住民の力が及ばなくなり、その結果水質汚染が進み、次第に魚種や漁獲量が減少、瀕死の湖になってしまった経緯がある。

嘉田先生は、この湖を再生するため「生活環境主義でいこう！」と主張し、人とびわ湖の関係を生活者の視点で見直すことの大切さをこの著書で啓蒙されている。(岩波ジュニア新書)。本日の講演の大部分はこの著書に述べられているので、ぜひ一読をおすすめする。また講演に使用されたPPT資料に詳細にかつ分かりやすく解説されているのでレジュメとして掲載させていただいた。嘉田先生の考えるびわ湖再生の道実現に、何らかの形で私たちも貢献できることを願い、協働の機会を摸索したいと思います。

5月と10月にびわ湖で観察会を実施することを紹介したら、ぜひ参加させてほしいとのご希望であった。この講演会を機会に交流の輪が広がり、私たちの活動がさらに発展することを予感する講演会であった。

以上

